

A 語句の意味と読み

(1) 読み＝おおない／意味＝大きな地震。「なゐ」が「地震」を表す古語。(ルビの示し方は教科書によって差があるので、お使いの教科書に合わせることに。) / 「ゐ」は現代仮名遣いでは「い」。「大地震」と書いて「おほなゐ」と読ませる読みの問題が定番

(2) (地震が) 起こる。揺れ動く。 / 「なゐふる」で「地震が起こる」。雨や雪が「降る」ではない

(3) 程度がはなはだしい。ものすごい。 / 数が多い意味もあるが、ここは揺れの激しさの程度をいう

(4) 完全である。無事である。 / 「まったし」と読む。現代語の「まったく」のもとになった語。ここは下に打消の「ず」がついている形

(5) いかにも子どもらしい、あとに何も残らないたわいのない遊びごと。ままごとのような遊び。 / 「はかなし」＝たわいのない・頼りない。「あとなしごと」＝あとに残らないとりとめのないこと

(6) 勇猛だ。気が強く荒々しい。ここは武士のこと。 / 「猛(たけ)し」。同じ場面の初めに出てくる「あるもののふ」(＝武士)を言いかえている

(7) 及ばない。かなわない。 / 「如(し)く」＝匹敵する・及ぶ。その打消。昔の地震も今度の地震にはかなわない、という比較

B 文法

(8) ラ変動詞「侍り」の連用形。「あり」の丁寧語で、ここは本動詞。「大地震ふること(が)ありました」の「ありました」にあたる。 / ★「侍り」は謙譲語(貴人のおそばにお仕えする)と丁寧語の両方があり、ここを謙譲語と答えるのが最大のミス。地の文で「～ました」と訳せるので丁寧語。なお同じ本文でも「遊び侍りし」「見侍りし」の「侍り」は、動詞の下について丁寧の意味を添える補助動詞で、②とは働きがちがう

(9) 過去の助動詞「き」の終止形。自分が直接体験した過去を回想して述べる。 / 「き」＝直接体験した過去、「けり」＝伝え聞いた過去・気づき。長明は実際にこの地震にあっている

(10) 完了(存続)の助動詞「り」の終止形。四段動詞「ひたす」の已然形に接続している。※「り」の接続を四段の命令形と説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせることに。 / 「り」はサ変の未然形と四段の已然形(一説に命令形)につく。「さみしい(サ未四已)」の語呂で覚える

(11) 不可能。「～することができない」。可能の助動詞「べし」の未然形「べから」に、打消の助動詞「ず」がついた形で、ここは「(羽がないので) 空を飛ぶこともできない」の意。 / 「べし」の意味は推量・意志・可能・当然・命令・適当。打消は

下についた「ず」が受けもつ。文脈が「羽なければ」なので、禁止ではなく不可能

(12) 係助詞＝「こそ」。結び＝「おぼえ侍りしか」の「しか」(過去の助動詞「き」の已然形)。活用形＝已然形。 / 「こそ」の結びは已然形。「ぞ・なむ・や・か」なら連体形。「なりけり」の「けり」は気づき・詠嘆(～だったのだなあ)

(13) 「～さえ」の意で、軽いものをあげて重いものを推し量らせる類推の用法。「口に出して言う人さえない」。 / 「だに」には「せめて～だけでも」(最小限の限定)の用法もあるが、ここは類推

C 主語・指す内容・敬意の方向

(14) 作者(鴨長明)から、この文章の読者への敬意。丁寧語なので、敬意の向かう先は読み手である。 / 地の文の丁寧語は「書き手→読み手」。会話文なら「話し手→聞き手」

(15) 作者鴨長明をはじめとする、地上で逃げ場を失った人間。(長明自身の心の中の思いとして読む。) / 直前の「羽なければ、空をも飛ぶべからず」と対になっている。空へ逃げられない人間の側の思い

(16) この世の恐ろしいものすべての中で、ということ。『方丈記』ではこの段の前に大火・つむじ風・遷都・飢饉といった災いが語られており、それらもふくめて「恐ろしいもの」を指している。 / 「五つの災い」の最後がこの地震。だから「(さまざまな恐怖の中で) 本当に恐ろしかったのは地震だった」となる

(17) 作者鴨長明。 / 「侍り」がついているので、丁寧に語っている書き手自身の行為。ここも「侍りしこそ～見侍りしか」で「こそ」の係り結びになっている

D 口語訳

(18) 海は傾いて、陸地を水びたしにした。(海の水が押し寄せて陸をひたした、という意。) / 「ひたせり」は「ひたす」＋完了・存続の「り」。津波のようすを述べている

(19) 都のあたりでは、あちらこちらで、お堂や塔・みたまやなど、一つとして無事なものはない。 / 「在々所々」＝あちらこちら。「全からず」＝無事ではない

(20) 龍であったならば、雲にでも乗ろうものを(乗れるだろうに)。※「ばや」を願望の終助詞と見て「龍でありたいものだ、(そうすれば) 雲にでも乗ろう」と訳す教科書もある。お使いの教科書の説明に合わせることに。 / 「なら」は断定「なり」の未然形。「ば」は順接の仮定条件、「や」は詠嘆の間投助詞で「龍であったらなあ」。人間には逃げ場がないという嘆きを、ありえない仮定の形で言っている

(21) (あの地震のことを) 言葉に出して口にする人さえない。 / 「ことばにかく」＝口に出して言う。「だに」＝～さえ

E 内容・記述

(22) 建物が崩れて立ちのぼる塵や灰のようすを、燃えさかる火事の煙にたとえている。直後の「雷にことならず」とともに、身近なものを引いて地震のすさまじさを実感させる表現。／『方丈記』の災害描写は、比喻と対句でたたみかけるのが特色

(23) ふだんは人前で取り乱すことを恥とする勇猛な武士でさえ、わが子を失った悲しみの前では、恥も外聞も忘れて声をはばかり泣き悲しんだ、ということ。子を思う親の情の深さは、身分や気丈さを超えるものだと言明は受けとめている。／直後の「いとほしくことわりかな」＝いたわしく、また（嘆くのも）もっともだ、まで含めて答えると点になる

(24) 「四大種」は仏教で万物をつくるとされる地・水・火・風の四つ。そのうち水・火・風はいつも害をもたらすが、大地だけはふだん格別の異変を起こさない。その大地までもが揺れ動いた今度の地震が、いかに異常で恐ろしいものであったかを際立たせている。／「大地は本来動かないもの」という前提があるから、地震の異常さが強調される

(25) あれほどの大地震も、月日が重なり年が過ぎてしまうと、そのことを口に出して言う人さえいなくなる、ということ。長明はここで、人の心の移ろいやすさ・忘れやすさを嘆いており、それが『方丈記』全体を貫く無常観につながっている。／★地震の恐ろしさだけを書く和不十分。「時がたてば口にする人さえいなくなる」＝忘れてしまう人の心、まで書くのがこの段の主題

F 文学史・思想（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝鴨長明／鎌倉時代の初め（一二一二年ごろ成立）／『枕草子』『徒然草』とあわせて日本三大随筆（三大随筆）と呼ばれる。／「ゆく河の流れは絶えずして…」で始まる随筆。無常観が全体の柱

(27) 読み＝しだいしゆ（現代仮名遣いでは「しだいしゅ」）／無常観。／無常観＝すべては移り変わり、とどまるものはないという見方。冒頭の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」がその宣言にあたる

(28) 安元の大火・治承の辻風（つむじ風）・福原遷都（都遷り）・養和の飢饉。／火・風・人の世の乱れ・飢え・地の順で並ぶ。テストでは順番ごと問われることがある

【現代語訳（全文）】

また、同じころだったのだろうか、ものすごく大きな地震が起こったことがありました。そのありさまは、尋常ではありません。山は崩れて川を埋め、海は傾いて陸地を水びたしにしました。地面は裂けて水が湧き出し、大きな岩は割れて谷へ転がり落ちます。岸边を漕ぐ船は波に漂い、道を行く馬は足の踏み場を失ってよろめきます。

都のあたりでは、あちらこちらで、お堂や塔・みたまやなど、一つとして無事なものはありません。あるものは崩れ、あるものは倒れてしまいました。塵や灰が立ちのぼって、燃えさかる火の煙のようです。地面の揺れと家のこわれる音は、雷と変わりません。家の中にいれば、たちまち押しつぶされそうになります。外へ走り出れば、地面が割れ裂けます。羽がないので、空を飛ぶこともできません。龍であったならば、雲にでも乗ろうものを。恐ろしいものの中でも本当に恐ろしかったのは、ただ地震だったのだなあと思われました。

その中に、ある武士の一人っ子で、六つか七つほどであった子が、土塀のおおいの下に小さな家を造り、たわいのないまごとのような遊びをしておりましたが、突然（土塀が）崩れて埋められ、跡形もなく平らに押しつぶされて、二つの目玉などが一寸ほど飛び出してしまったのを、父母が抱きかかえて、声もはばかり泣き悲しみ合っておりましたようすは、しみじみと悲しく見えました。子を失った悲しみには、勇猛な武士でも人目の恥を忘れてしまうのだなあと思われて、いたわしく、また（嘆くのも）もっともなことだと見ました。

（万物をつくる）四大種のうち、水・火・風はいつも害をもたらすけれど、大地に至っては、これといった異変を起こさない（のに、今度は起こした）。

昔、斉衡のころとかに、大地震が起こって、東大寺の大仏のお頭が落ちるなど、たいへんなことがいろいろあったそうですが、それでもやはり今度の地震には及ばなかったということだ。

このようにものすごく揺れることは、しばらくして止まりましたけれども、その余震は、しばらくのあいだ絶えません。ふだんなら驚くほどの地震が、一日に二、三十度も起こらない日はありません。十日、二十日と過ぎたので、しだいに間隔があいてある日は一日に四、五度、二、三度、あるいは一日おき、二、三日に一度などとなり、だいたいその余震は三か月ほどだったでしょうか。……月日が重なり、年が過ぎてしまった後は、（あの地震のことを）言葉に出して口にする人さえいません。